

資質・能力を育む授業デザイン

榊隼弥*・山口隼人*・天野慎也*

(2022年11月16日 受理)

Class Design that Nurtures Qualities and Abilities

SAKAKI Junya, YAMAGUCH Hayato, AMANO Shinya

要約

平成29年3月に新たな中学校学習指導要領（以下、学習指導要領）が告示され、中学校においては令和3年度より全面実施となった今回の学習指導要領では、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努め、その育成に当たっては、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善が必要であると述べられている。

本校では学習指導要領の改訂に伴い、すべての教科等で目標が三つの柱で整理された。「何ができるようになるか」という育成を目指す資質・能力がすべての教科等で整理され、明確になった。それを受けてその資質・能力を育むための「授業デザイン」のあり方を見直していく必要がある。今回は、「授業デザイン」のあり方や実際の方法、そして、本校の「Society 5.0に向けた人材育成」に掲げられている共通して求められる力を育成するための具体的な手立てとともに報告する。

キーワード：資質・能力，授業デザイン，Society 5.0に向けた人材育成

1. 学校の実態把握

中学校学習指導要領解説総則編（以下、解説総則編）において、《各学校が生徒や地域の実態等を十分に踏まえ、創意工夫を存分に生かした特色ある教育活動を展開することが大切》（文部科学省，2017）と述べられている。自分たちの学校が置かれている状況を、生徒や地域の実態などから

* 鹿児島大学教育学部附属中学校 教諭

適切に把握することは、よりよく授業デザインをする上で不可欠である。また、学校の実態を把握することは、授業デザインをする上で前提となる。特に、育成を目指す資質・能力を明確にし、指導を実現するために必要な方策を整理する根幹となる。表1は、実態把握の例となっている。

表1 実態把握の例

把握の対象	実態把握の方法
生徒の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の生活の様子の観察（複数の職員による客観的な観察） ・ アンケートや調査で集まるデータ ・ 学力検査の結果 等 ・ 各行事等の振り返り
地域の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校評価アンケート ・ 地域や保護者の思い ・ 地域や保護者とのつながり 等

本校の生徒は、アンケート結果から学習に意欲的に取り組み、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に一定の成果が見られた。そこで、これからの新たな時代をより豊かに生きることができるように、Society 5.0における社会像や求められる人材像を念頭におくことにした。

予測困難な時代の中で、新たな社会を牽引する人材を「Society 5.0に向けた人材育成」（文部科学省, 2018）では、「技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材」、「技術革新と社会課題をつなげ、プラットフォームを創造する人材」、「様々な分野においてAIやデータの力を最大限活用し展開できる人材」などを挙げている。そして、これらの人材に共通して求められる力として、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」、「科学的に思考・吟味し活用する力」、「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」の三つの力を整理している。

これらの学校の実態や社会の情勢から育成を目指す資質・能力の明確化を図ることにした。

2. 育成を目指す資質・能力の明確化

2.1. 学校の教育目標の明確化

授業デザインをするに当たっては、資質・能力の三つの柱を踏まえつつ、学校の教育目標を明確にすることが重要である。そのために、各学校がこれまで大切にしてきたことと、学習指導要領で示される資質・能力の三つの柱を照らし合わせて整理し、「学校で育成を目指す生徒像」を職員間で共有することが大切である。そうすることで、学校全体が同じ方向を向いて指導に当たることができると考える。

本校では、学校の教育目標を資質・能力の三つの柱で整理するために、本校の目指す生徒像の中にある具体目標や努力点などが、資質・能力の三つの柱のどの部分に該当するかを考え、キーワードを抜き出した。本校の【ゆたかな心】（いわゆる「知・徳・体」の「徳」に当たる項目）の例を示す。表2は、【ゆたかな心】に対する具体目標と努力点となっている。

表2 【ゆたかな心】に対する具体目標と努力点

具体目標	努力点
正しいことや美しいことを大切にすることを育み、完成を磨きながら、自他の伸長のために、誠実に行動する生徒を育成する	(1) 集団の一員としての自己を意識し、自他の伸長を願いながら、何事にも誠意をもって、協働して取り組む態度の育成 (2) 正しいこと、美しいことを素直に感じ合い仲間とともにそれらを大切にしていこうとする態度の育成 (3) 能動的な活動を通して、仲間のよさを感じ取り、切磋琢磨して成長していこうとする態度の育成

表2の努力点からキーワードを抜き出し、そのキーワードを資質・能力の三つの柱で見つめ直し、資質・能力ごとに学校の教育目標を整理した。

そうすることで、自校における育てたい生徒の「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を具体的にイメージすることができる。そして、教科間で学校の教育目標を具現化するための課題を共有し、その解決に向けた取組の方向性を明確にすることにつながる。また、教科等で育成された資質・能力を横断的に働かせる総合的な学習の時間の目標や授業デザインを検討する上でも有効だと考える。

本校では、前述した「新たな社会を牽引する人材に共通して求められる力」を踏まえつつ、学校の教育目標を資質・能力の三つの柱で以下の表3のように再整理し、育成を目指す資質・能力の明確化を図った。

表3 本校の育成を目指す資質・能力

知識及び技能	物事の本質を深く追究したり、よりよく自己を生かして協働したりするための知識・技能を身に付けるようにする。
思考力、判断力、表現力等	目標に向かって知識・技能を効果的に活用し、よりよいものをつくり上げるための必要な力を養う。
学びに向かう力、人間性等	自他と他者の理解を深め、よりよいものをつくり上げ、豊かな自尊感情ならびに他者を大切にする深い感情を育み、社会に積極的に参画していく態度を養う。

さらに、これらの整理された資質・能力を基に、各教科でも育成を目指す資質・能力を三つの柱で整理した。そして、明確化を図った資質・能力の育成を目指して、学校全体で共通実践に取り組んだ。

2.2. 各教科等の目標の明確化

日々の授業は各教科等の目標を達成するだけでなく、学校の教育目標の達成につながることを意識することが重要である。解説総則編には、《生徒に「生きる力」を育むことを目指して教育活動の充実を図るに当たっては、学校教育全体及び各教科等の指導を通してどのような資質・能力の

育成を目指すのかを、資質・能力の三つの柱を踏まえながら明確にすること」(文部科学省, 2017)と述べられている。つまり、資質・能力の三つの柱で整理された学校の教育目標を基に、各教科等の目標を資質・能力の三つの柱で整理することが重要である。そうすることで、各教科等の目標と学校の教育目標とのつながりが明確になる。また、各教科等が学校の教育目標の達成のために、その一部を担っていることも明確になる。

3. 指導計画の作成

授業デザインを行うためには、単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通しながら、指導計画を作成していくことが必要である。その際、単元や題材の構成を工夫したり、内容や生徒の学習の実態に応じてその取扱いを吟味したりして、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた効果的な指導が行えるよう配慮する必要がある。また、教える場面と考えさせる場面を関連付けながら適切に内容を組み立てていくことや、各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすることが求められると考える。

3.1. 年間指導計画の作成

各教科等の目標を実現するために、生徒の実態や目指す生徒の姿を踏まえて、1年間のうちに各教科等で何を、いつ学ぶかを定めたものが年間指導計画である。この作成に当たっては、総合的な学習の時間を視野に入れて、計画的・組織的に指導計画を作成することが重要である。

3.2. 単元や題材の指導計画の作成

1単位時間の授業は、何時間かを積み重ねた学習内容のまとまりのうちの一時間である。また、このまとまりが単元や題材である。一回の授業ですべての学びが実現されるものではなく、「単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか。」「自分の考えなどを対話によって、広げたり深めたりする場面をどこに設定するか。」「学びの深まりをつくりだすために、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか。」などを考えることが重要である。また、単元や題材の設定については、各教科で工夫を講じることが大切である。

3.3. 指導と評価の計画

作成した指導計画に応じて、いつ、どのような方法で、生徒の観点別学習状況を評価するための記録を取るのかについて、評価の計画を立てることが求められている。

授業は、学校の教育目標達成、かつ教科の目標達成を通して、生徒が身に付けるべき資質・能力を育成するために行う必要がある。よって、単元や題材の指導内容に即して、各観点の目標を明確にし、評価規準を作成する必要がある。具体的な評価の計画については、「評価場面」、「評価方法」、「評価規準の設定」などの要素を系統的に位置付ける必要がある。

「評価場面」については、単元や題材のどの場面で評価するのかを明らかにする必要がある。その際、総括的評価はすべての時間、すべての学習活動で行う必要はない。例えば、「目標の実現状況を把握できる段階であるか。」、「適切に学習状況を把握できる場面であるか。」を重視しながら評価場面を設定することが考えられる。

「評価方法」については、評価資料をどのような方法で収集するのかあらかじめ検討しておく必要がある。総括的評価として扱うのならば、すべての生徒の評価資料を安定して確保できることも重要である。例えば、「観点の趣旨にふさわしい評価方法に配慮しているか。」、「すべての生徒の評価資料を収集することが可能であるか。」、「偏った評価にならないように、多様な評価方法を用いているか。」、「生徒一人一人の目標の実現状況を適切に把握できるか。」を重視しながら評価方法を工夫することが考えられる。

「評価規準の設定」については、学校教育を通して資質・能力の三つの柱のバランスのとれた育成が求められる。つまり、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成するということは、評価においても特定の観点到偏らないように配慮することが必要である。例えば、評価の観点をバランスよく配置するために、「1 単位時間の授業において、評価を行う観点が明確になっているか。」、「評価規準と学習活動に整合性がとれているか。」、「単元や題材において、評価規準の数的なバランスがとれているか。」、「単元や題材において、同一観点の評価規準が時間経過とともに質が深まっているか。」、「必要性・信頼性が認められる評価規準であるか。」に配慮することが考えられる。

これらを踏まえて、評価の進め方と留意点は表4のような流れである。

表4 評価の進め方の例

評価の進め方	留意点
1 単元や題材の目標を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説、学校の教育目標等を踏まえて作成する。 ・ 生徒の実態や前単元までの学習状況等を踏まえて作成する。
2 単元や題材の評価規準を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「評価の観点およびその趣旨」が、教科及び学年（または分野）の目標を踏まえたものになっているか確認する。 ・ 各教科等における「内容のまとめ」と「評価の観点」との関係を確認する。 ・ 観点ごとのポイントを踏まえて、「内容のまとめごとの評価規準」を作成する。
3 「指導と評価の計画」を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1, 2を踏まえ、評価場面や評価方法等を計画する。 ・ どのような評価方法を基に、「十分満足できる」状況（A）や「おおむね満足できる」状況（B）と評価するかを考えたり、「努力を要する」状況（C）への手立て等を考えたりする。
4 授業を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観点別学習状況の評価を行い、生徒の学習改善や教師の指導改善につなげる。
5 観点ごとに総括する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集めた評価資料やそれに基づく評価結果などから、観点ごとの総括的評価（A, B, C）を行う。

4. 本時の指導方法の具体化

4.1. 生徒の実態把握

本時の指導方法を具体化する上で、生徒の実態を全般的に把握することから始める必要がある。これは単元や題材で育成を目指す資質・能力が、1回の授業のみで育まれるのではなく、単元や題材を通じた学習の積み重ねによって育成されるからである。また、個々の実態を把握することで学習者に個別最適化された学びにもつながると考える。よって、関連する単元や題材の習得状況、教科に対する興味・関心・意欲等を学校生活の様子や事前のアンケート等によって、把握することが本時の指導方法の具体化には欠かすことができない。例えば、本時の指導方法を具体化する際、以下の表5のような項目について、学習者の把握を行うことが考えられる。

表5 学習者について把握しておくべき項目

<p>既有知識・経験</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生徒がこれから学習する内容や関連する内容について、どの程度知っているか、経験しているか。 これまでの学習として、どのようなことを学んでいるか（他教科，他分野，他内容，他学年の学習を含む）。
<p>学習への興味・関心・意欲</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の単元や題材に対する興味・関心・意欲がどの程度あるか。 学習の方法によって興味・関心・意欲がどのように変わるか。
<p>対象学級の特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学級の雰囲気や特に他学級と異なることなど，対象学級にどのような特徴があるか。 どのような生徒が在籍しているか。

4.2. 育成を目指す資質・能力の確認

本時の授業において、「何を学ぶか」という教育の内容を踏まえつつ、生徒が「何ができるようになるか」を併せて重視し、生徒に対してどのような資質・能力の育成を目指すのかを指導のねらいとして設定する。つまり、生徒に何を身に付けさせ、授業後に生徒にどのような姿になってほしいのかを明確にもつことが重要である。

このように、目標を明確にし、その目標に到達しているかどうか分かる評価と指導を一体化して考えることが大切である。そして、目標と評価を明確にした上で、教科等横断的な視点を持ちながら、それらを実現するために必要な学習の内容と指導方法を総合的に組織していくことが求められると考える。

4.3. 学習過程の計画

目標と評価を明らかにし、その達成に向けた指導を考える。一般的に1単位時間の授業は「導入」、「展開」、「終末」という場面から成り立っている。本校のこれまでの実践を基にすると、「導入」、「展開」、「終末」の各学習場面において考えられる活動の例は、次の表6のように整理することができる。

表6 各学習場面において考えられる活動の例

導入	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時までの学習や経験を振り返り，確認する。 ・ 解決すべき問題を捉えて，その解決に向けて何が課題かを考える。 ・ 本時の学習の目標を捉えたり学習課題を設定したりして，見通しをもつ。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目標達成のために，これまでの学習や経験とは異なる新しいことを確認する。 ・ 理解が深まるように指導・助言をもらう。 ・ これまでに学んだことや経験したことを活用したり，練習したりする。 ・ 解決の過程や結果について意見交換をして，学び合う場を充実する。 ・ 定着の度合いや改善の方法について，適切に助言をもらう。
終末	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の学習を振り返り，学習の成果を自覚する。 ・ 本時の学習をまとめて，定着につなげる。 ・ 次の学習への見通しをもち，他の場面で学習が生かすことができるようにする。

これらの活動を必要に応じて取捨選択して，組み合わせ方を変えたり，順番を変えたりして目標の達成を目指す必要がある。その際，「生徒の思考の流れに沿った学習過程になっているか。」，「育成を目指す資質・能力を育むための学習過程になっているか。」という視点で学習過程を工夫することが大切である。

なお，これらの学習過程の型は1単位時間の授業だけではなく，単元や題材にも当てはめることができる。具体的には，単元や題材の「導入」としての1時間目に何をするのか，単元や題材を通してどのような目標をもたせるのか，単元や題材における評価の場面をどのように設定するのか，といったことである。単元や題材にも同様の関係が見られることを踏まえて，指導方法の具体化を進めることが重要である。

4.4. 指導の手立ての確認

学習過程の導入場面では，問題を見いだして課題を設定させたり，学習への動機付けを行ったりする学習活動が予想される。例えば，問題を見いだして課題を設定させる指導の工夫としては，対象（自分自身や社会，教材等）について，多面的・多角的に捉えさせ，具体的にすることによって，新しい問題に気付かせることができる。あるいは，グループでの検討段階を取り入れ，他者視点で課題設定を行う工夫や，ICT 機器を活用して客観的に自分の姿を捉えさせる工夫等が挙げられる。また，学習への動機付けを行う指導方法としては，教科本来がもつ楽しさや面白さを味わわせる工夫をしたり，向社会的な欲求を促すような必然性を感じる学習課題を設定したりする工夫等が挙げられる。

学習過程の展開場面では，知識及び技能の習得に向けて練習させたり，問題や課題のよりよい解決策を追究させたりする学習活動が予想される。例えば，知識及び技能の習得に向けた指導の工夫としては，単に新しい知識を提示するだけではなく，生徒がこれまでに獲得した知識を相互に関連

付けたり、他の生徒と共有したりする場面を設定することで、概念的な理解につなげる工夫等が挙げられる。また、問題や課題のよりよい解決策を追究させる指導の工夫としては、自らの考えやアイデア等を振り返る過程を構造的に外化させ、いつでもその場面を振り返り、想起できるようにしたり、一度考えた解決策を見直す視点を与えたりする工夫等が挙げられる。

学習過程の終末場面では、自身の学習を振り返って成果を自覚させたり、次の学習や他の場面で学習が生かされるように促したりする学習活動が予想される。例えば、学習を振り返り成果を自覚させる指導の工夫としては、学習を通して身に付けた資質・能力が日常生活に活用できるという学びの有用性に気付かせたり、学びの軌跡や身に付いた資質・能力を確かめられるシートを活用したりする工夫等が挙げられる。また、次の学習や他の場面で学習が生かされるように促す指導の工夫としては、一度解決した問題の結果から新たな問題を見いださせる視点を与えたり、成果や課題を明確にして生徒に考えさせたりする指導の工夫等が挙げられる。

導入、展開、終末のすべての場面で ICT を活用した指導の工夫が必要である。GIGA スクール構想において、一人一台端末が整備され、その積極的な利活用が推進されている。文部科学省と総務省が連携して進めてきた「学びのイノベーション事業」報告書において、ICT を推進した学びの在り方について、《ICT は、時間的・空間的制約を超えること、双方向を有すること、カスタマイズが容易であることなどがその特長》(文部科学省, 2014) と述べられている。加えて、このような特長を活用することにより、「①子供たちが分かりやすい授業を実現」、「②一人一人の能力や特性に応じた学び (個別学習)」、「③子供たち同士が教え合い学び合う協働的な学び (協働学習)」など、新たな学びを推進することが可能になると述べられている。例えば、①については、画像や動画を活用して情報を視覚化したり、提示する情報を拡大化・焦点化したりする工夫等が考えられる。②については、一人一人の習熟度に応じて課題を提示したり、一人一人の学習の履歴を記録したりする個別最適な学びを実現するための工夫等が考えられる。③については、共有ソフト等を活用して、意見を共有・整理したり、テレビ会議システム等を活用して遠距離をつないだ活動をしたりする協働的な学びを充実させるための工夫等が考えられる。

本校で育成を目指す資質・能力を各教科等の学習活動を通して育成できるように、各教科等で表7の三つの活動を充実させるため、指導方法を工夫した。

表7 三つの活動

読み解き・対話する活動	情報 (文章や式, 芸術なども含む) を, その文脈や関係性などを含めて正しく理解したり, 他者と対話したりして, 自己の考えを広げ深めるための活動
思考・吟味する活動	問題 (課題) を解決して得られたモノ等, またはその過程で得られた考え方を振り返り, よりよくするための活動
価値を見つけ・生み出す活動	問題 (課題) を解決して得られた解 (唯一解, 最適解) や創り上げた作品等をもとに, 目的に応じて多面的・多角的に評価したり, それらを生かして新たな価値を創造したりするための活動

5. 授業の振り返り・改善

授業デザインは授業の実施がゴールではない。なぜなら、計画に従って授業デザインをしたとしても、適切な資質・能力が育まれていないこともあり得るからである。そこで、単元や題材、1単位時間ごとの授業の目標に照らし合わせながら、生徒の学習の状況や授業デザインの在り方を振り返ることが大切である。また、学校の教育目標とも照らし合わせながら、指導の方法を評価・改善し、次の授業デザインへと反映していくことが重要である。育成を目指す資質・能力の育成に向けて、常に計画と実践に対して、評価と改善を行いながら、よりよい授業デザインを追究していくことが求められる。

本校の2年間の研究・実践を振り返ると、育成を目指す資質・能力の三つの柱をバランスよく育成するためには、「主体的に学習に取り組む態度」の育成を目指した授業デザインを行う必要があると改善点が見つかった。そこで、生徒が自らの学習を調整しながら学習活動に取り組もうとする視点を新たな指導方法として改善し、指導と評価の工夫を行った。具体的には本校では、生徒が学習を調整しながら各教科等の学習活動に取り組み、各教科等の学習を効果的に進めることができるようにするため、自己調整学習方略の要素を参考にしつつ、表8のように「本校で捉えた学習を調整する視点」をもって授業デザインを行うことにした。

表8 本校で捉えた学習を調整する視点

視点	内容	例
コンテンツの視点 (認知的な視点)	学習内容そのものに注意を向けさせる視点	繰り返し読み書きしたり、自主的に質問や調査をしたりして獲得した知識や自分の考えを、既習事項と結びつけて整理・要約したり、確かめたりして、より深い理解やよりよい考えにつなげられるようにすること
プロセスの視点 (メタ認知的な視点)	学習の活動状況や理解状況に注意を向けさせる視点	目的や目標をもって、解決方法の計画を立て、必要に応じて確認・修正しながら学習を進め、自己の学習を省みて、学んだことを次に生かしつなげられるようにすること
リソースの視点 (リソース管理の視点)	自分が使うことのできる資源(リソース)を有効に活用させる視点	必要に応じて他者へ援助を求めるなどして、どのような課題にも努力し続け、他者と関わりながら学びを深められるように、学習の計画や環境を整え管理できるようにすること

[付記]

本稿は、鹿児島大学教育学部附属中学校令和3年度及び令和4年度の研究紀要で発表した内容に基づきその内容を発展させ、その研究成果をまとめたものである。